

[書評] 交換様式の変形と「力」の生成

『力と交換様式』について

王 欽

柄谷行人は『トランスクリティーク』(2001年)においてはじめて四つの交換の形態について議論し、さらにそれを『世界史の構造』(2010年)のなかで「交換様式」として体系的に理論化した。その中で、柄谷は従来のマルクス主義＝史的唯物論の生産様式論に異議を唱えながら、古代から現代までのさまざまな社会構成体がいかに世界的に展開してきたかを交換様式の視点から整理している。AからCまでの交換様式を簡単にまとめてみると、Aは氏族社会で実践された贈与と互酬にもとづく交換であり、Bは国家による暴力的略取とそれがもたらした再分配、そして国家のなかで支配者が自分の支配を維持するために被支配者と約束せざるをえない服従と保護の契約を意味する。それに対して、Cは資本制経済における貿易が典型的なケースにほかならない。

柄谷のモデルに対して、これまで数多くの議論が行われてきた。そのなかで、最も問題視されているのは、交換様式Dにほかならない。はたしてDはいかなるものなのか。まさにそれが『力と交換様式』(2022年)という大著の関心であるといえるだろう。本書のなかで柄谷は「私はこれまでの著作で交換様式について論じてきたが、A・B・Cが中心であった。Dに対して本格的に向き合うのは、事実上、本書が初めてだといってよい」と述べているからである¹。

交換様式Dとは何か。柄谷は、「Dは厳密に言えば、交換様式というよりも、交換様式A・B・Cのいずれをも無化するような力としてあるものだ」と書いている²。この議論をたとえば『世界史の構造』における議論と比べると、両者の区別がはっきりするだろう。

¹ 柄谷行人『力と交換様式』、岩波書店、2022年、34頁。

² 同前。

交換様式 D……は、交換様式 B がもたらす国家を否定するだけでなく、交換様式 C の中で生じる階級分裂を越え、いわば、交換様式 A を高次元で回復するものである。それは、自由で同時に相互的であるような交換様式である。しかしこれは、前の三つのように実在するものではない。それは、交換様式 B と C によって抑圧された互酬性の契機を想像的に回復しようとするものである³。

これに対して、『力と交換様式』では D は高次元で A を回復するどころか、「A、B、C」をすべて無効化していくある種の「力」と認識されているのである。こうして、むしろ D が他の交換様式の外部に存するものであり、他の交換様式をも一度その可能性の条件に引き戻していくものである、といえるのかもしれない。この点については、またあとで論じる。

柄谷の考えでは、社会運動を通して D を実現できると人々が思い込んでいるのは、そもそも彼らがすべての交換様式にひそんでいる「力」を十分に理解できないからである。したがって、われわれはまず交換様式 A、B、C に生じる「力」を解明しなければならない。

「死の欲動」と「原遊動性」

まず、柄谷によると、交換様式 A は人間が遊牧的な生活から定住的生活へと変わったときに形成されたものである。『世界史の構造』において、このプロセスは「定住革命」とよばれている。注意すべきは、A はその段階で出現するものの、それが共同体内部での交換法則となっているわけでは必ずしもない、ということである。「厳密にいうと、この交換様式 A は共同体の内部の原理なのではない」、と柄谷は指摘している⁴。贈与とお返しにもとづく「互酬」も共同体と共同体の間で行われる。

³ 柄谷行人『世界史の構造』、岩波現代文庫、2015年、12頁。

⁴ 柄谷行人『世界史の構造』、8頁。

『世界史の構造』で柄谷は人類学者のモースの議論を借りて、贈与のなかにひそんでいるとみなされる「ハウ (Hau)」という霊的な力に、氏族社会における互酬性の働きを見出している。これに対して、『力と交換様式』では、彼はフロイトの「死の欲動」をもって A がいかに自分なりの「観念の力」を生みだすかを再解釈しようとする。たとえば、柄谷は遊牧民が定住してからの生活を「有機的」とよんで、まさにフロイトのいう「死の欲動」が「無機質の状態」に戻ろうとする衝動を意味するごとく、定住した人々もたえず遊牧状態へと戻る欲動をもつと指摘している。このような欲動が「他に向けられる攻撃欲動として奔出」することになり、「さらに、それを抑えて他者への譲渡＝贈与を迫る「反復強迫」があらわれ」るのである。それは「「霊」の命令として出現した」、と柄谷は結論している⁵。

すると、A に生じる「観念の力」は実は「贈与とお返し」それ自体がもたらすものではなく、交換される物にひそんでいる霊的な力でもなく、むしろそれはもはや消え去ったはずの、「欲動」としてしか生き残っていない無機質の状態＝遊動性に関する記憶とその記憶に対する抑圧に由来する、ということになる。いいかえれば、柄谷のいう「原遊動性」と氏族社会の定住状態との間にある緊張関係は、氏族社会に属するメンバーの独立性を保ちながらも、「贈与とお返し」についての規則を作り出したのである。

交換様式の観点からいえば、首長制社会は、交換様式 A、そして、そこから生じる力によって支えられている。この“力”は、定住化によって抑えられた原遊動性 (U) の強迫的な回帰にもとづくものだ。そのため、A を通して、原遊動性がある程度保持される⁶。

ゆえに、A の力はこのふたつの生活様式につねに内在している緊張関係なしにはありえない。あるいは、このような「観念の力」は必ずしも意識されていない、「被抑圧されたものの回帰」への恐怖に起源をもつといってもよい。

⁵ 柄谷行人『力と交換様式』、94頁。

⁶ 同前、123頁。

実は、『世界史の構造』において柄谷はすでにそれぞれの交換様式が生みだす力について論じている。ただ、そこで使われる言葉は「観念の力」ではなく、たんに「権力」であった。たとえば、柄谷は、「こうして明らかなのは、どの交換様式からもそれに固有の権力が生じるということ、そして、交換様式の差異に応じて権力のタイプもそれぞれ異なるということである」といっている⁷。

マルクス主義の国家論にくわしい人は、このような「権力」を支配階級がつかう暴力機構とみなすだろう。これに対して柄谷は何度も異論をとなえてきたが、『力と交換様式』では「観念の力」をもちだしてこれを否定する。「そもそも、国家はたんに支配階級が用いる“装置”なのではない。それは交換様式 B にもとづく「力」である」、と⁸。

では、交換様式 B はいかに「観念の力」を生みだしており、その「力」はいかなるものだろうか。

交換様式 B の（不）可能性の条件

国家と交換様式 B について、『力と交換様式』における柄谷の着目点は、『世界史の構造』におけるそれとはやや違っていると指摘できるだろう。後者において、彼は国家の対外的な側面を強調している。

交換様式 B もまた共同体の間で生じる。それは一つの共同体が他の共同体を略取することから始まる。略取はそれ自体交換ではない。では、略取がいかにして交換様式となるのか？ 継続的に略取しようとするれば、支配共同体はたんに略取するだけでなく、相手にも与えなければならない。つまり、支配共同体は、服従する被支配共同体を他の侵略者から保護し、灌漑などの公共事業によって育成するのである⁹。

⁷ 柄谷行人『世界史の構造』、23 頁。

⁸ 柄谷行人『力と交換様式』、284 頁。

⁹ 柄谷行人『世界史の構造』、9-10 頁。

一方で、『力と交換様式』で柄谷は着目点を国内の側面に移し、ホブズが『レヴァイアサン』で論じた主権者と臣民との社会契約に重点を置いている。たとえば、彼は以下のようにのべている。

国家が成立するのは、Aとは異なる交換様式が成立する時、つまり、ある者が絶対的に支配し他の者がすべて自発的に服従するという関係が成立する時、いかえれば、首長が王となる時である。それが交換様式Bにほかならない。(中略) 軍事的征服は、相手を物理的な力によって抑えるが、それだけでは、相手が自発的に服従することにはならない。それを可能にするのは、物理的な力ではなく、交換様式Aに伴う霊的な力をさらに上回るような霊的な力である¹⁰。

しかし、一見すると、柄谷の議論にはひとつのパラドックスがふくまれているように感じられる。つまり、一方で服従と保護の相互関係が交換様式Bの「観念の力」によって保証されながらも、他方では、その相互関係があるかぎりにおいてBがBとして現れる。では、Bの「霊的な力」は、はたしてどのように生じるのだろうか。

氏族社会から国家への移行に関して、そしてそのプロセスにおける交換様式AとBの関係についての柄谷の議論を考えてみよう。すでにのべたように、氏族社会や首長制社会の中に国家を自然的にまたは演繹的に見出すわけにはいかない。むしろ、それらの前—国家的な社会構成体は国家の形成を邪魔するものにほかならない。

国家は、氏族社会あるいはその拡張である首長制社会の内部からは出てこない。つまり、国家の王は首長の単なる延長ではない。それはいわば、「契約する人々の個別的な利害のはるか上空にそびえたつ第三者」である。それが、氏族社会や首長制社会がもたらすような戦争状態を終結させる「力」を

¹⁰ 柄谷行人『力と交換様式』、116頁。

もつ。それは、靈的な力である¹¹。

思うに、交換様式Bに生じる「観念の力」は諸歴史時期と諸地域において変わりつつあるAから説明されなければならない。どういうことだろうか。

支配者と被支配者の相互関係（服従と保護）が存在するときのみ、国家が成立する。ホブスによると、このような社会契約のもとで、被支配者が譲渡したのはもともと彼らに固有の自然権、つまり自己を存続させることを唯一の目的とする自然権にほかならない。他人が狼としてあらわれてくる危険な「自然状態」において生きるかぎり、誰も都合よく自然権を行使し、あらゆる手段を取って自分の命を守ることが許される。一方で、主権者は原則上都合よく他人＝臣民の命を奪う権利、つまり自然権そのものを自分に保留している。いいかえれば、主権者は被支配者からなんの積極的な権利をも得ず、ただ固有の自然権を他人に譲渡せずすんだだけである。被支配者が主権者から保護を約束されるのは、彼に権利を譲渡したというよりも、自分のあらゆる手段に訴える権利をいったん放棄したからであるといってもよい。ホブスの想定したような社会契約において見るかぎり、ある意味で支配者と被支配者の関係はもともとあった平等性の極端な変形であるほかない。すると、主権者と被支配者の関係からみれば、国家を成立させる論理的必然性はどこにもない。国家は、たまたま歴史上起きたAの変形がもたらしてしまったものにすぎないからである。

したがって、柄谷は「交換様式Bが確立されるためには、Aが制圧されなければならない」¹²と述べているのだが、ここで重要なのは、AとBが調和できないということではなく、BはAの変形である、ということである。

BはAとは異なるにもかかわらず、Aと類似する。Aの互酬性が水平的なものであるとしたら、それを垂直的な上下の関係にしたものがBである。

（中略）交換様式Bはある意味でAの変形であり、また、それによって支え

¹¹ 同前、115頁。

¹² 同前、124頁。

られるのである¹³。

ちょうど A の「力」が「原遊動性」への抑圧から由来するのと同じように、国家が形成されるなかで抑圧された A が自己回復しようとする姿勢とそれに対する国家からの抑圧が、B の「力」を生み出したといえるだろう。

くりかえしているが、交換様式 A は（独立性と相互友好を確保するという）積極的な意味でも、（戦争をもたらすという）消極的な意味でも、国家の形成を邪魔しており、ヒエラルキー的秩序を不可能にする。ゆえに、われわれは原則上交換様式 A から B へと自然的に移行することはできない。

しかし、他方で、A が前—国家的社会構成体において共同体の「死の欲動」としてあらわす危うさには、あるいは、互酬性にもとづく社会構成体とそれを破壊して前—共同体的な生き方に戻る衝動との緊張関係には、まさにもう一つの可能性、すなわち A が極端に変形することで、水平的な関係を垂直的な関係にしていまい、結局 B にもとづく共同体（＝国家）を生みだしてしまう可能性がつねに存する。

要するに、A の互酬性は B の可能性の条件であり、またその不可能性の条件でもある。つまり、後者における服従と保護の相互関係をたもつために、A を抑圧しなければならないが、同時にそれを守らなければならない。極端に言えば、B は A に胚胎しているといってもよい。A の変形にひそんでいる危うさにこそ、B の「観念の力」が生じると思われる。

物神——マルクスをヘーゲ尔的に“転倒”する

次に問わなければならないのは、交換様式 C の力である。

『力と交換様式』で柄谷は国家（B）と資本（C）の関係をつぎのように説明している。「C は B が始まるのと同じ時期に始まった。つまり、いずれも、共同体と

¹³ 同前、106-107 頁。

共同体の間の「交換」に始まったのである」、と¹⁴。たとえBにもとづくとしても、異なる社会構成体においてはCの働き方も異なる。たとえば、アジアの社会とゲルマン社会を論じるとき、柄谷はそこでBとCの異なる様相を指摘している。

アジアの社会でCがBに従属するかたちで発展したのに対して、ゲルマン社会ではAが濃厚に残ったため、Bに従属することなくCの拡大が可能となったのである¹⁵。

一方、近代産業資本主義の成立についてはどうなのか。

産業資本以前の社会構成体では、交換様式CはBの下に従属しているのだが、そこでは、国家はいわば、「否」という権力であった。しかし、Cが支配的となるにつれて、国家の働きが違ってくる。国家は積極的に規律をもたらす¹⁶。

つまり、Cが支配的となる近代資本制社会が歴史の舞台に登場するまえに、BとCが密接しながらも、必ずしも切り離せないわけではない。しかし、いったんCが支配的になる資本制社会にいたると、両者は密接につながるようになる。

では、Cがいかに支配的となったのか。実はこれについて、『世界史の構造』と『力と交換様式』は別々の説明を示していると思われるが、紙幅の制限でここでは後者のみに注目しよう。簡単にいうと、柄谷の答えは「物神」である。マルクスのいう「物神」は実は商品交換のあらゆる形式に付きまとう根本的な、還元できない衝動だと、彼は指摘している。あたかもマルクスを再びヘーゲルの“転倒”してしまうかのように、彼はつぎのように書いている。

¹⁴ 柄谷行人『力と交換様式』、131頁。

¹⁵ 同前、221頁。

¹⁶ 同前、251頁。

『資本論』は、ヘーゲルの『論理学』にもとづいて、精神＝物神の発展をとらえる仕事であった。そして、その最後の段階で現れる株式資本とは、資本そのものが商品として売買されるようになったことを意味する¹⁷。

柄谷はマルクスの議論の出発点に、ヘーゲル的な“精神”のような「物神」を置き、貨幣や資本のあらわれを「物神」の自己展開として論じているかのようにみえる。むろん、「物神」は『資本論』においてはけっして中核的な概念とはいえない。柄谷はこの事実について、以下のように説明している。

実は、マルクスは、『資本論』第一巻でそれについて述べた後、物神という言葉を二度と使わなかった。しかし、事実上、さまざまなかたちで、霊的な「力」を見ようとしたのである。たとえば、彼はそれを「信用」に見出した。(中略)それは単なる信頼ではなく、人を強いる観念的な力であり、その意味で物神的である¹⁸。

実は、商品交換で信用と貨幣の働きについて、柄谷は『世界史の構造』で別の仕方でも論じているし、『力と交換様式』で強調される「商品たちの社会契約」という表現さえも、すでに『世界史の構造』にあらわれていた。では、なぜ柄谷はあらためて「物神」に集中するのだろうか。

もう一度『世界史の構造』にもどろう。そこで、柄谷は貨幣の「力」について、つぎのようにいっている。

交換様式Cからも、それに固有の「力」が生れる。それは国家によって生まれるものではなく、逆に、国家がそれを必要とするものである。その力とは、具体的にいえば、貨幣の力である。それは、交換によって直接に他の物

¹⁷ 柄谷行人『力と交換様式』、268頁。

¹⁸ 同前、270頁。

を獲得できる権利である¹⁹。

ここで、貨幣の力は「物神」でも「観念の力」でもなく、たんに「直接に他の物を獲得できる権利」である。また、別のところで彼は商品としての貨幣の「力」を貨幣の一般的等価形態としての働きとみなしている。

貨幣としての商品にそのような「力」があるのは、それが一般的な等価形態におかれたからである。その力は、いわば、商品たちの社会契約によるものである。だが、いったん貨幣が成立すると、ある転倒が生じる。貨幣がもはやたんなる商品交換の手段ではなく、商品といつでも交換できる「力」である以上、貨幣を求め蓄積しようとする欲望とそのため活動が生じるのだ。それが資本の起源である²⁰。

ここでいう「転倒」を「物神」と置き換えてはならないだろう。いいかえれば、同じ「社会契約」という隠喩をもちだしてはいても、『世界史の構造』で柄谷は貨幣の成立にふくまれる“転倒”を強調しているのに対して、『力と交換様式』のなかで彼は最初から「物神」を貨幣の裏付けとして提起しているのである。

では、なぜ柄谷はマルクスをヘーゲル的に“転倒”しなければならないのか。

差異化としての資本

いうまでもなく、柄谷の「物神」への固執を解明することは、Cがいかに「力」を生みだすかを解明することである。貨幣について、柄谷は本書でつぎのようにいっている。

マルクスは『資本論』で、貨幣の生成を、商品たちの交換において見ようとした。それは人間の意志・企画にもとづくものではない。それは、商品た

¹⁹ 柄谷行人『世界史の構造』、131頁。

²⁰ 同前、149頁。

ちの交換において、合意の上に成立したものであり、また、“物神”として働くものである²¹。

あらためて「合意」という言葉に注目しよう。「商品たちの社会契約」を前提とするこの「合意」が意味するのは、たとえば買う者と売る者の合意ではけっしてなく、あくまでも商品たちの合意でなければならない。しかし、商品たちはいかにして合意を得るのだろうか。

ここで、少し遠回りする必要があるかもしれない。近代資本主義社会においては、BとCが密接しながらAを必要な補填として回収し、「低次元」で回復させている。産業資本の拡張とともに、国家は積極的に労働者を養成しなければならない。したがって、AとBがどんなに大きく変形したところで、「 $A=B=C$ 」という構造は変わっていない。つまり、Cの「観念の力」の由来をAとBの外部に求めなければならない。

柄谷がエンゲルスの議論に従って指摘するように、もしも一八四八年革命がヨーロッパ各国で社会主義的な要求を制度的に回収し、内在化するものであったとすれば、『共産主義宣言』の冒頭で予言した「コミュニズムの幽霊」はもはや制度化され実現されるべきものではなく、むしろすでに具象化されたものとなるであろう。これに対して、マルクスはそのとき新たな認識を得た、と柄谷は指摘している。

というより、新たな「幽霊」を見出したのだ。すなわち、“共産主義という幽霊”にかわって、“資本主義という幽霊”を。別の言葉でいえば、物神（フェティッシュ）としての資本を。そして、四八年革命の後、彼が専念したのは、そのような霊がいかにして生じたのかを突き止めることであった²²。

ここで、この判断が正しいかどうかは問題ではない。重要なのは、「資本主義と

²¹ 柄谷行人『力と交換様式』、273頁。

²² 同前、267頁。

いう幽霊」が「共産主義という幽霊」にとってかわったことである。もしも「資本＝ネーション＝ステート」という構造が十九世紀のヨーロッパにおいて成立し、しかもそれがマルクスによって『資本論』のなかで批判的に探究されたとすれば、われわれは、二十世紀以降あらわれてきた資本主義国家のさまざまな変容やそれに対する抵抗——福祉国家からソ連的社会主義まで——は、根本的には同一の構造のトポロジカルな反復にすぎず、けっして資本主義それ自体への超克にはならない、といわなければならない。

この意味で、たしかに『世界史の構造』ですでに指摘されたように、商品交換の実現は A と B の支えを必要とし、「共同体間にはじまる商品交換様式 C は、他の交換様式 A や B と連動するかたちでのみ存在してきた」²³けれども、それはけっして A と B が商品交換の合意を裏づけることを意味しない。A の意味する独立性も、B の意味する国家による信用担保も、商品交換にとって不可欠な要素でありながらも、その条件にはならない。商品たちに社会契約を結ばせるキッカケは、純粋な差異性それ自体にほかならないからである。

そもそも、資本の価値増殖をもたらすのは、物の生産自体ではなく、それがもたらす差異化である。いいかえれば、資本制の下での生産とは、むしろ差異の生産なのだ²⁴。

過去十数年の間、資本主義経済は大きな変化を迎えた。一見すると、現代資本主義はマルクスの時代のそれとかけ離れたところに立っているかのようにみえる。しかし、柄谷の考えでは、現代資本制経済は相変わらずマルクスの議論の射程に覆われており、「資本の自己増殖を可能にするのは絶え間ない「差異化」だ」²⁵というマルクスの認識を越えていないのである。

したがって、C の「力」は差異を無限に求める衝動にほかならない。この意味

²³ 柄谷行人『世界史の構造』、131頁；また『力と交換様式』、133頁参照。

²⁴ 柄谷行人『力と交換様式』、297-98頁。

²⁵ 同前、298頁。

で、「人間の意志によって」資本主義経済を「操作」しようとするさまざまな「社会改造案」は、柄谷からみれば、失敗するに決まっている。「資本や国家の力は、物神や怪獣の“力”であり、人間の意志を越えたもの」だからである²⁶。

来るべき“共産主義”

以上われわれは交換様式 A、B、C がいかにそれぞれの「観念の力」を生みだすかについて考えた。では、D に関してはどうだろうか。

読者を驚かせるかもしれないが、『力と交換様式』は結局 D の「力」に関しては積極的に論じていない。なぜなら、それは根本的に不可能だからである。

D は、それとして意識的に取り出せるものではない。「神の国」がそうであるように、「ここにある、あそこにある」といえるようなものではない。また、それは人間の意識的な企画によって実現されるものでもない。それは、いわば“向こうから来る”ものだ²⁷。

いずれにせよ、「資本＝ネーション＝ステート」という円環のなかで思考するしかないかぎりでは、D が他の交換様式のあとであらわれるものであり、そして必ず到来するものである、としかいいようがない。結局 D の「観念の力」がいかに生じるかは、われわれの予想や意志を越えることである。にもかかわらず、柄谷はそれを逆手にとって希望を語りはじめる。

「希望」とは、人が未来に意識的に望むことではない。また、実現すべき何かでもない。それは、いやおうなく、向こうからくる。つまり、むしろ希望がないように見える時にこそ、「中断され、おしとどめられている未来の道」としての希望が到来する。つまり、共産主義は、むしろその現実がとう

²⁶ 同前、314 頁。

²⁷ 同前、188 頁。

ていありそうもないような状況においてこそ到来する²⁸。

柄谷の議論を敷衍していえば、まさに「資本＝ネーション＝ステート」という円環から外に出るキッカケを見出せない状態にわれわれがおかれているからこそ、その円環に回収されえない恐ろしい外部性がありうる、といってもよい。われわれは、すべての現実が資本制経済の差異化する自己運動に覆われてしまうという絶望的な事実にDの「観念の力」を見出さなければならない、というパラドックスを生きなければならない。

(おう きん

東京大学 准教授)

²⁸ 同前、383頁。